

シルク

2008(平成20)年1月27日鑑賞(OS シネマズミント神戸)

★★★



監督・脚本＝フランソワ・ジラルド／原作＝アレクサンドロ・バリッコ『絹／SETA』（白水社刊）／出演＝マイケル・ピット／キーラ・ナイトレイ／アルフレッド・モリーナ／役所広司／芦名星／中谷美紀／國村隼／本郷奏多／マーク・レンドール／ケネス・ウェルシュ／カラム・キース・レニー（アスミック・エース配給／2007年日本、カナダ、イタリア映画／109分）

第3章

内容の面白さは男女を問わず

……日本・カナダ・イタリア合作のロマンあふれる一大叙事詩、そしてキーラ・ナイトレイ、役所広司、中谷美紀の出演ながらあまり注目されなかったのは、その抽象性のせい……？ ポイントは「シルクの肌をもった少女」の解釈だが、これが難しい……？ 日本人が真に国際人になるためには、こんな広い視野に立った物語にもっと親しむ必要があると私は思うのだが……？

4人の誰が一番国際派……？

何ゴトにも閉鎖的で鎖国的な体質が、現在の日本の株価低迷の原因。竹中平蔵、木村剛ラインはそう主張しているし、大田弘子経済財政担当大臣や渡辺喜美金融担当大臣もその認識は同じ……？ そのため、空港管理会社への外資の出資を規制する「空港整備法改正案」については、それぞれの立場で猛反対……。

日本の映画界もそれと同じで、長い間日本の俳優の国際進出は三船敏郎や石原裕次郎などの例外を除いてほとんど実現しなかった。しかし、近時はそれが大きく変化している。その代表は、日本の男優陣で言えば渡辺謙、真田広之、中井貴一そして『シルク』の原十兵衛役で登場した役所広司。

そこでこの4人について誰が一番国際派かと考えてみると、話題性という観点からはトム・クルーズと共演した『ラストサムライ』（03年）がハリウッドの話題を呼んだ渡辺謙が断トツ。他方、集中度という観点からは『ヘブン・アンド・アース』（03年）と『鳳凰 わが愛』（07年）の中井貴一。本数からいうと、『ラストサムライ』『上海の伯爵夫人』（05年）、『PROMISE』（05年）、『ラッシュアワー3』（07年）、『サ

ンシャイン 2057』(07年)の真田広之。そう比べると、『バベル』(06年)での役所広司はそもそも出番が少なかった(『シネマルーム14』340頁参照)し、『シルク』での役所広司は日本国内にいて英語をしゃべっているだけだから、国際派とは名ばかり……? したがって、国際派という観点からは、役所広司はまだ4人の中では4番手……?

なぜ主役がマイケル・ピットに……? なぜフランスで英語が……?

この映画でエレヌを演ずるキーラ・ナイトレイは『パイレーツ・オブ・カリビアン』三部作(03年、06年、07年)等でビッグネームとなった、私の大好きなイギリス人女優。これに対して主人公エルヴェを演ずるマイケル・ピットは、『ヴィレッジ』(04年)などで出演していたらしいが、残念ながら私が全然知らなかったアメリカ生まれの俳優。

このマイケル・ピットの演技に不満があるわけではないが、この映画ではエルヴェの出番が圧倒的に多いうえ、フランスでの演技と日本の村での演技の両方が要求されるという難しい役。したがって、ホントはエルヴェ役にはもっとビッグネームをもってきた方が興行面ではよかったのでは……?

もっと根本的な不満(不自然さ?)は、この映画は舞台はフランス、そしてエルヴェもエレヌもフランス人だという設定なのに、なぜか2人を含む全俳優が英語をしゃべっていること。よし悪しや好き嫌いは別として、やはりフランスを舞台とし、フランス人の男女を主人公とした映画には、フランス人俳優を起用すべきだったのでは……?

「少女」に注目!

この映画のストーリーの骨子は、製糸工場を創設したバルダビュー(アルフレッド・モリーナ)が、より良い蚕の卵を求めて大陸を横断し、はるか東洋の国日本までエルヴェを派遣するというもの。フランスから日本へは、今なら飛行機で10時間も飛ばせば到着するが、日本の幕末時代の1840~50年頃、フランスから日本まで行き、日本から蚕の卵をフランスまで持って帰るのは、命がけの大変な旅。

そんなストーリーのため、この映画のタイトルが『シルク』とされているのだが、映画ではもう1つ、絹のような美しい肌をもつ幻想的な少女(声名星)が登場する。

この映画の冒頭シーンは日本のある雪国の村にある露天風呂。美しい湯けむりの中、1人温泉に浸かる美しい少女の背中が、この映画のテーマをうまく物語っている。ちなみに、この少女は再三登場し重要な役割を演ずるが、セリフは一切なしというところがミソ……。

あの時代の日本は……？ 原十兵衛は何を……？

エルヴェがはじめて蚕の卵を求めて大陸を横断し、はるばる日本までやってきたのは、正確な年代はわからないが1850年代……？ 当時の日本は幕末だが、アメリカのペリー艦隊が浦賀沖に出現したのが1853年7月。そして大政が奉還されたのが1867年11月9日。

そんな激動の時代の日本を訪れたエルヴェの世話をしたのは、闇でさまざまな取引をしている権力者、原十兵衛（役所広司）。日本のシーンは山形県酒田市で撮影したらしいが、こんな田舎に住む原十兵衛がなぜ英語をバラバラしゃべっているのか全くわからず、きわめて不自然。しかし、この映画ではそれは禁句……？

大切なことは、1度目の来日でエルヴェは原十兵衛と腹を割って話し合い、また彼の傍に仕えている「少女」に強い関心をもったということ。そのため、エルヴェは2度、3度と日本に旅立つことになるのだが、日本はまさに幕末の激動の時代だから、原十兵衛の立場も安穏なままとはいかないのは当然。しかして、3度目の来日の時は、村は何者かに襲撃されて焼け野原に。そんな激動のあの時代を味わいながら、原十兵衛なる不思議な人物のキャラと役割をじっくりと考えたいものだ。

西洋の美と東洋の美をタップリと……

最初の来日で見事に日本からフランスへ蚕の卵を持ち帰ったエルヴェが、バルダビユーや村人から大歓迎されたのは当然。その報酬は莫大な額だったらしい。そこで、愛妻家のエルヴェは気前よくそれを使ってエレヌのための庭園をつくるための土地をプレゼントすることに。この映画は当然エルヴェをメインとする人間ドラマだが、「美人薄命」を地でいくエレヌが丹精込めてつくる美しい庭園が1つの見どころ。

他方、「エレヌの庭園」が西洋の美なら、東洋の美は幻想的で水墨画的な雪国の風景。湯けむりの中、温泉に身を浸す少女の姿も美しいが、雪で覆われた日本の村の姿は実に美しい。「蝶々夫人」におけるアメリカの海軍士官ピンカートンの例をもち

だすまでもなく、外国人が日本女性の美しさに惹かれるのは当然。それはエルヴェも例外ではなく、彼が再度日本を訪れたのは、あの少女の姿を忘れることができなかったため。もっとも、そんなエルヴェにはあの少女ではなく、別の若く美しい女性が原十兵衛によって「提供」されたが……。

この映画では、そんな西洋の美と東洋の美を対比しながら、美しい映像美を味わってもらいたいものだ。

マダム・ブランシュの重要な役割に注目！

本来の美人役はもちろん、『嫌われ松子の一生』(06年)や『自虐の詩』(07年)等で超個性的な役を見事に演じる中谷美紀が、この映画でもマダム・ブランシュという希有な役を味わい深く演じている。19世紀半ばのフランスに娼館を営むこんな日本人がいたとは到底考えられないが、もし実在していたとすれば、日本から蚕の卵を仕入れようとしていたバルダビューにとって、手紙の執筆依頼、信頼できる日本人の紹介など貴重な女性であったことは当然。

そんなマダム・ブランシュとエルヴェがはじめて面会したのは、エルヴェが少女から預かった短い日本語の手紙をどうしてもフランス語に翻訳してもらいたかったため。もちろん、それはエレヌには内緒。なぜなら、そこにはきっとこんな文章が綴られているに違いないと、エルヴェは期待していたのだから……。すると案の定、その言葉は「必ず戻ってきてください。さもなくば死にます」という何とも意味シなもの……。

この時、エレヌは2人の間に子供ができないことに悩んでいたが、エルヴェはそんなエレヌを残して再び日本へ旅立つことに。しかして、その真の目的は蚕の卵……？ それとも、あのシルクの肌をもった少女との再会……？

マダム・ブランシュの役割はこのワンチャンスの翻訳だけではなく、その後さらに大きくなり、最大のポイントとなる長文の手紙を翻訳することになるから、そんな重要なマダム・ブランシュの役に注目！

抽象画の好きな人にお薦めだが……

この映画は、なぜフランス人が英語をしゃべるのか？ 十兵衛がなぜ流暢な英語をしゃべるのか？ などとくだらない疑問をもつ私のような人間には不向きで、どちら

かという抽象画が好きの人にお勧め……？ それを象徴するのがシルクの肌の少女の登場で、彼女の存在やその行動をどう解釈するのかはあなたの自由……？

したがって、この映画とその原作は大学の文学部のゼミでの討論の素材としては最適。また『ジェイン・オースティンの読書会』（07年）のような読書会が日本でブームになるとすれば、是非これを教材にしたいもの。

もっとも、世界的ベストセラー小説の映画化であるうえ、ハリウッドからはキアラ・ナイトレイという大物女優が、日本からは役所広司、中谷美紀が出演しているにもかかわらず、この映画が大きな話題を呼んでいないのは、その抽象性のせい……？ 現に私が観た時の観客席はガラガラ。

日本人が真に国際人になるためには、こんな広い視野に立った物語をじっくりと味わえる力量を身につける必要があると私は思うのだが……。

2008(平成20)年2月16日記

ミニコラム

ノキ弁とは？ ソクドク弁とは？

業界用語はいろいろあるが、法曹界で有名なのが、「ボス弁」と「イソ弁」。イソ弁とは居候弁護士の略だが、私が登録した1974年当時そんな実態はなく、勤務弁護士という言葉が一般的。ところが近時は「ノキ弁」や「ソクドク弁」という新語が登場！ 上戸彩主演のドラマ『ホカベン』は6月18日最終回を迎えたが、当初多くの国民はこれを弁当屋のドラマと誤解したのでは？

ノキ弁とは、弁護士の大量増員時代の中、就職にあぶれた新人が、給料がなくてもいいから弁護士事務所の軒だけをお借りするという新スタイルで、

東京を中心にジワジワと浸透中。ソクドク弁は私も今年初めて知った言葉で、登録、即独立するから即独弁。なるほど、と感心してはダメ。あこがれの職業だったはずの弁護士にもついにワーキングプアの時代到来というのが、多くの新人たち共通の認識なのだから。

08年2月17日付朝日新聞社説は「弁護士の年間所得は平均1600万円らしい」を論拠に、「弁護士増員——抵抗するのは身勝手だ」と主張したが、さてあなたは どう思う？

2008（平成20）年6月20日